

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531005

研究課題名(和文)新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究

研究課題名(英文)Historical, comparative study on the skills of teachers with "asylum" in the period of "New Education Movement"

研究代表者

山名 淳(Yamana, Jun)

京都大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80240050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新教育運動期において、児童・生徒の「本性」に基づいて彼らの自己活動の余地を保持するために、学校における「アジール」的な時空間(教師の明確な計画性を逃れる曖昧な時空間)の重要性が認識され始めたことに注目し、新教育的な学校における「アジール」との関わりにおける教師の技法を、新教育運動の影響が最も鮮明にみられたイギリス、ドイツ、アメリカ合衆国を考察対象として比較史的に究明することを心試みた。日本との比較考察という視点も導入し、今後の継続的な研究の展望を示した。本研究の成果は、報告書『新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究』にまとめて公にした。

研究成果の概要(英文)：In the period of "New Education Movement", progressive teachers began to recognize the importance of liberating school children from teachers' control and giving them space and time for free activities based on children's "nature". We, historically and comparatively, analyzed the meanings of such space and time, which can be called "asylum" ("Asyl" in Germany), focusing on the skills of teachers for making and using "asylums" in schools in England, Germany and the U.S.A. where "New Education Movement" flourished. In addition, we compared the situation of the Western world with the Japanese one, and showed the prospect for advancing this study. The research report, Historical, Comparative Study on Skills of Teachers with "Asylums" in the Schools during the Period of "New Education Movement", was published in March 2014.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：アジール 新教育 学校空間 比較史 教育史

1. 研究開始当初の背景

(1) 基本的な問題関心

学校における「アジュール」的な時空間（機能的に曖昧な時空間）は、今日においても、オープンスクール構想等に典型的にみられるように、学校教育の硬直化を回避するために、重視されることが多い。その一方で、人間形成への意図的な介入を行う施設としての学校にあえて機能的に曖昧な「アジュール」的な要素を導入することの困難性もまたしばしば指摘されるところである。計画化された人間形成のコントロールの域を逃れるような開かれた部分を保持するためには、学校内に取り入れられた機能的に曖昧な要素をめぐる教師の高度な技法（ここでいう技法とは、意識的に練り上げられた技術のみならず、習慣のなかで培われた便法をも含む）が不可欠である。本共同研究は、そのような問題関心から出発した。

(2) 共同研究の蓄積

本研究グループは、平成 20-22 年度科研において、新教育運動期における学校空間に関する共同研究を行った（基盤研究(C)「新教育運動期における学校空間の構成と子どもの学習活動の変化に関する比較的研究」、研究代表者は渡邊隆信）。その結果、新教育期において機能的に曖昧な空間が有する教育的意義が認識され、そのような空間が学校に構造的に配置され始めたことが明らかになった。同研究を始めとする本研究グループの研究蓄積に基づきつつ、研究代表者が以前よりドイツ田園教育舎を事例として注目していた「アジュール」的な時空間がさまざまなかたちで当時の新教育的な学校で流布しつつあったことが指摘される。

2. 研究の目的

19・20 世紀転換期を中心に展開されたとされる新教育運動では、児童・生徒における「本来」の性質に基づいて彼らの「自己活動」の余地を保持するために、学校における「アジュール」的な時空間（機能的に曖昧な時空間）の重要性が認識され始めた。本共同研究は、そのような仮説のもとに、新教育的な学校における「アジュール」を、イギリス、ドイツ、アメリカ合衆国を考察対象として比較史的に究明することを目的とした。同時に、そこに生きる教師と児童・生徒の間で繰り広げられる関係性のなかで教師による独自の技法が生み出されていったのではないかという想定に基づき、そのような技法を歴史の中から抽出することが可能であるかどうかを確認しようとした。

3. 研究の方法

(1) 「アジュール」概念の教育学的検討

「アジュール」というテーマは、新教育運動研究のみならず、広く教育学的な研究の領域において十分に検討されてきたとは言い難い。したがって、本研究においては、「アジュール」概念そのものを教育に関する考察に導入するための理論的な検討を関連文献の読解をもとに行った。

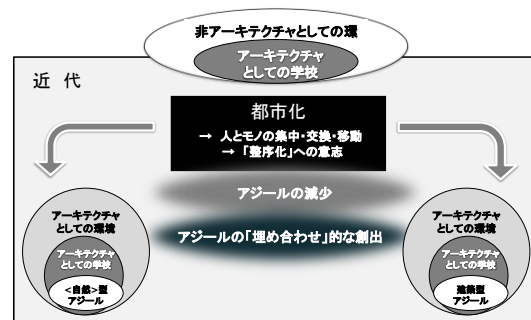
(2) 具体的な歴史的事象の考察

具体的な歴史分析的な考察においては、新教育運動の影響が最も鮮明にみられたイギリス、ドイツ、アメリカ合衆国を考察対象とした。学校教育の領域において「アジュール」性が重視されるようになる各国の動向を概観すると同時に、そのような傾向を自らの特徴とする典型的な学校の状況を資料に基づいて分析した。

(3) 前提としての〈田園/都市〉図式

本研究グループのこれまでの成果に基づいて、新教育運動期における「アジュール」の時空間を有する学校には、大きく分類して〈田園〉型の学校（＝キャンパス内外に自然環境の要素を配置するタイプ）と〈都市型〉の学校（＝大規模校舎であることを前提として、当時の新しい建築技術に支えられて開かれたスペースが設えられているタイプ）の 2 種類があるとみなすことから出発した。そこから導き出された最初の仮説は次のようなものであった。

① 19 世紀のとりわけ後半を通じて、欧米では近代における都市化の進行によって人工的な空間構築物（＝アーキテクチャ）に人びとの環境が覆われる度合いが大きくなっていった。こうしたアーキテクチャは文化の一部としてそこに住まう人びとを保護する一方で、人とモノの過剰な集中や環境・交通・衛生の問題などを生起させ



③ その一方で、子どもたちに対する都市空間の否定的な作用だけを強調するのではなく、むしろ都市の構成力である人工的な空間構成によって子どもたちの「アジュール」を新たに設えていくこともまた試みられるようになった。

④ 「田園」型にしる「都市」型にしる、そのような構想は、結果的に 20 世紀にお

いて子どもたちを対象としたアーキテクチャを拡張していく駆動力となっていたのではないか。

むしろこうした想定はまだ単調すぎるものだ。たとえば、世紀転換期に世界が都市空間によって覆い尽くされたわけではない。そのかぎりにおいて、それぞれの地域や時代により細やかな視線を投げかけて考察する必要がある。この図式はそうした個々の考察に取り組むためのさしあたりの土台である。

4. 研究成果

(1) 研究活動

研究代表者(山名淳)および研究分担者(宮本健市郎、山崎洋子、渡邊隆信)の他、複数回にわたって開催された本共同研究会の参加者数名(舟木徹男、小林正泰、稲井智義、小原武次郎、花輪由樹)によって共同研究の成果がまとめられた。とりわけ重要であったのは、2013年12月23日に京都大学芝蘭会館研修室(京都市)において開かれた公開研究会である。そこでは、「アジール」と教育に関する考察に関心を寄せる教育研究者や教育者と真摯な議論および活発な意見交流が実現した。その成果は、最終的に『新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較的研究』(平成23-25年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書)として公にされた。この報告書が本共同研究の成果を集約しているといえる。

(2) 各考察の概要

第1章(山名淳)では、「アジール」を鍵概念としつつ、19・20世紀転換期における時代の危機診断とともに生じた〈学校＝共同体〉を事例として、近代における共同体の可能性と課題についてシステム理論を前提として検討することを試みた。ここで具体的に注目したのは、「新教育」における〈学校＝共同体〉、とりわけ「学校のゲマインシャフト化」を標榜した田園教育舎系の学校である。教育学的な考察に「アジール」概念を導入する際に重要であると思われる知識と手法にも言及しつつ、新教育的学校の「アジール」を具体的に検討したうえで、学校における「アジール」が両義的な性質を帯びることを強調した。

第2章(宮本健市郎)では、アメリカ合衆国において進歩主義教育の影響を受けた校舎と教室の変化に着目した。ティーチャーズ・カレッジで学校建築の研究を進めていたエンゲルハートの教育思想を取り上げ、子どものアジールが校舎のどこに想定されていたかを検討した。エンゲルハートは、1920年代に全国の校舎の状況を精力的に調査して、校舎採点簿を作成した。それは、能率的で「完全な校舎」の基準を前提としており、

曖昧な空間(アジール)を排除して、標準的な校舎(工場モデル校舎)を普及させるための手段であった。校舎は教育実践とは関連をもっていなかったのである。しかし、1950年代に彼が作成した校舎採点簿は、子どもの活動や発達に視点を定め、子どもの多様な活動や、子どもの身体的・心理的な安定を重視するようになっていた。エンゲルハートの視点の転換は、モダニズム建築の影響によってもたらされたものであり、学校には「魂の避難所」(アジール)としての機能が期待されていた。20世紀の半ばから普及しはじめた「家庭モデル校舎」は、子どもにアジールを保障するための技術であり、進歩主義教育の遺産といえることができる。

第3章(山崎洋子)では、世界の新教育運動の嚆矢となったイギリスの新教育運動を取り上げ、それを主導した新学校(New School)という歴史事象に、避難所・保護施設を意味する「アジール(asylum)」の観点を付与して解釈することを試みた。新学校は、国家からの強制的な教育から逃れるアジールとして機能したが、その典型は、社会改革をめざして「冒険」と「理想」に挑んだダーティントン・ホール(Dartington Hall, 1925-1987)とダーティントン・ホール・スクール(1926-1987)、そして第二代校長カリー(W. B. Curry, 1900-1962)の教育思想に見出すことができる。そこで、まず、ダーティントン・ホールを拠点に社会改革に踏み出したエルムハースト夫妻と彼らの人的ネットワーク、そしてその組織と学校誕生の経緯を描出した。次に、カリーの社会思想と教育思想さらに平和思想とその具体的実践を解明した。カリーによれば、教育の目的は「文明化された共同体」の創出にあり、学校の役割は、戦争を肯定する社会秩序を変える技法、すなわち「論争的テーマ」を取り上げた「説得」の修練にあった。カリーは、教育の自由を探究すべく、アジールとしてのダーティントン・ホール・スクールで平和思想を訴え続けたが、このアジールは経済的危機に見舞われ終焉することになる。とはいえ、国家へのアンチテーゼの精神は、新たな芽を生み、再生へと歩み出している。

第4章(渡邊隆信)では、新教育系の学校における「アジール」の二重構造、すなわち、教師の明確な計画性を逃れる曖昧な時空間という意味での、教師-生徒関係における実践レベルのアジールと、公立学校制度の明確な計画性を逃れる曖昧な時空間という意味での、国家-学校関係における制度レベルのアジールとの、二重構造に着目した。そして、教育史上、国家による教育統制がもっとも徹底しておこなわれた時代の一つであるドイツのナチス期を取り上げ、その時代に新学校が、「ナチス教育の「同質化」(Gleichschaltung)によって制度レベルのアジールであることが否定されていく状況にどのように対応したのか検討した。具体的

には、ドイツの主な田園教育舎系自由学校のナチス政権への対応を概観した上で、オーデンヴァルト校を事例にして、ナチス政権成立前の実践レベルのアジールの状況と、成立後のナチスによるオーデンヴァルト校への干渉と、それに対する校長ゲヘープの対応、そしてオーデンヴァルト校の質変について考察した。

第5章(小林正泰)では、新教育とアジールの関係について日本を事例とした考察を行った。考察の対象としたのは、関東大震災後の東京に建設された「復興小学校」と呼ばれる学校建築である。この復興小学校は、「総てが教育的」な学校建築という基本コンセプトをもとに建設されたものであり、そこには新教育的な学校観が見出せる。一方で、日本における新教育運動の中心とされる私立新学校からは厳しい批判がなされ、具現化した建築の姿も対照的であった。類似する学校観を持ちながら、なぜそれほど対照的になったのか。そこで両者の学校建築観を「家庭」と「自然」という2つのキーワードを補助線としながら比較し、両者の異同を確認した。そこから浮かび上がったのは、外部社会から保護するアジールおよび教育的まなざしからのアジールという、学校空間におけるアジールの二重性であり、その二重性がもたらす子どもの保護と統制をめぐるジレンマであった。

第6章(舟木徹男)は、学術的概念として「アジール」を定義する試みである。第1節では現代ドイツ語のAsylと現代日本語の「アジール」がどのような意味で使用されているかを概観し、ドイツ語では宗教色の薄れた限定的な意味で、日本語では現代社会の閉塞感からの解放に関係した拡散的な意味で、それぞれ使われている現状を確認した。第2節ではオルトヴィン・ヘンスラーのアジール法定義とその諸特徴を検討したうえで、「アジール」を「人間に迫る心身の危機からの庇護をもたらす平和の場」と再定義し、個々のアジールを分類するためのカテゴリーを整理した。第3節においては、上記の定義に即して、アジールの近代的な諸形態が具体的に挙げられた。最後に第4節では、アジール論の基盤となる平和論において、宗教論、無縁論、自然法論、社会集団論などが、連携すべき隣接学問領域となることを指摘した。

第7章(稲井智義)では、2013年12月の公開研究会での報告と議論に触発されながら、新教育運動、およびそれと同時代に展開された「子どもの救済」との接点について、若干の考察を行った。その際、本稿の後半では、「子どもの救済」の歴史研究に示唆を与えてきたドンズロの研究と、「アジール」研究でも注目されているゴッフマンの『アサイラム』も参照し、両者の再読可能性を検討した。その要旨は、二点に集約される。第一に、新教育学校を分析する際に、「子どもの救済」という視点や、子どもが抱える階層性や社会

背景に注目する意義を提案した。第二に、子どもを救済してきた代表的施設である孤児院が、近年、ドンズロらも注目するゴッフマンの「アサイラム」に含まれていたことを受けて、孤児院への教育の歴史研究の必要性を提起した。したがって本稿によれば、新教育運動と「子どもの救済」の接点はこの両面の検討を経て、より確かな理解が可能になるであろう。

最後に、「アジール研究に寄せて」と題して三つのコメント(舟木徹男、小原武次郎、花輪由樹)を掲載した。

(3) 今後の展望

研究代表者および研究分担者が積み重ねてきた研究成果により、当初設定した目的はほぼ達成できたと考えている。

本研究の学術的特色および独創性は、第一に、これまでなおざりにされてきた新教育運動期の教師論を検討することによって、従来の新教育運動研究に新たな知見を付与することにある。第二に、「アジール」を計画的に保持された<自由>の余地とみなすかぎりにおいて、これまで主として教育哲学・思想研究の領域で扱われてきた教育における<自由>論を、世紀転換期という具体的な歴史の層における教育実践事例を対象とした考察へと移行させることができた。最終的に、今日においても重要とみなされる「開かれた学校」構想の原初形態が確認されると同時に、そこでいかなる工夫、問題、解消法が生じたのかを浮き彫りにするという課題と本研究は接続することができると考えている。

もとより3年間という限られた期間内にすべての課題をこなすことができたとはいえない。第一に、教育における「アジール」に関する本共同研究では主として空間構成に焦点が当てられた。「アジール」というどこまでも意味が拡張しがちな概念を柱にするためには空間構成への焦点化は妥当な戦略であったと思う半面、そこでの考察が時間などの他の次元や人間関係および個人の内面の次元の問題と同じキーワードでどのように繋がっていくかをさらに検討していく必要がある。第二に、教師の技法ということに関しては十分に考察がなされたとは言いがたい。当時の教師たちの方針や具体的な活動などを史料に基づいて体系化することはできるのだが、そのような体系の背後に隠された教育の「日常」を「アジール」との関係において再構成するということは困難を極めた。新教育的な現代の学校を対象としてフィールド研究を行うなど、この方向での調査に対してはさらなる工夫が求められる。第三に、教育学研究における「アジール」概念の使用についてさらに検討がなされなければならない。概念使用の検討はこの研究会でも十分に時間をかけてなしてきた。それにもかかわらず、解消されていない問題もまだ残されて

いる。公開研究会などでよく尋ねられた問いの一つは、「教育をする側に作用が『発見』されて意図的に設えられた『アジール』は本来の『アジール』とは呼ばないのではないか」というものであった。アジールは制度であり文化としての側面を有している、と私たちは考えている。この点についてより説得的に議論を構築していく必要がある。こうしたさらなる課題が浮き彫りになったこともまた、本共同研究の成果であると思う。

本共同研究では<田園/都市>という図式を念頭に置いて考察を試みた。本研究をとおして実感されたことは、<田園>型の学校も<都市>型の学校も、アーキテクチャ(=人工的な構造物)であることにはかわりなく、その点においては両者を近代の仕組みとして総合的に考察する視点と方法を模索する必要があるということである。本研究グループはそのような新たな課題意識のもとに、次の研究プロジェクトを構想中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 宮本健市郎 「学力テストにおける基準の変質—授業と評価の乖離—」 『日本デュイ学会紀要』第 53 号、2012 年、253-263 頁
- ② 宮本健市郎 「アリス・バロウズの学校建築思想：子どもの経験の豊富化」 『教育学論究』(関西学院大学教育学会編) 第 4 号、2012 年、89-99 頁
- ③ 宮本健市郎 「エンゲルハートの学校建築思想：工場モデルから家庭モデルへ」 『教育学論究』(関西学院大学教育学会編) 第 5 号、2013 年、139-151 頁
- ④ 山崎洋子 「イギリス新教育運動における『試験』・『知能テスト』をめぐる論争とジレンマ」 『武庫川女子大学紀要(人文社会科学編)』第 59 巻、2012 年、43-52 頁
- ⑤ 山崎洋子 「イギリス新教育運動の組織的拡大と思想的混迷」 『武庫川女子大学紀要(人文社会科学編)』第 59 巻、2012 年、53-62 頁
- ⑥ 山崎洋子 「NEF 第一回国際会議の場所的・空間的意味」 世界教育連盟(WEF) 日本支部『教育新世界』第 60 号、2012 年、18-32 頁
- ⑦ Yamasaki, Yoko (山崎洋子), “Continuing the Conversation: British and Japanese Progressivism,” *History of Education*, (ed. History of Education Society U.K.), Vol. 42, No. 3, 2013, pp. 335-349.
- ⑧ 山名淳 「『新教育』相対化論をめぐる教育学的<カノン>の考察方法—

歴史記述の虚構性をめぐる論争が教育学に示唆すること」 『教育学研究』第 78 巻第 4 号、2011 年、2-12 頁

- ⑨ 山名淳 「<学校=共同体>に穴を穿つ—『アジール』論からみた『新教育』の学校」 『近代教育フォーラム』第 21 号、2012 年、115-129 頁
- ⑩ Yamana, Jun (山名淳) : Japan's School Architecture as Mixture between the West and the East. 『臨床教育人間学』第 11 号、2012 年、55-65 頁
- ⑪ 山名淳 「教育学ディシプリンにおいて『国家』の意味論が浮上するとき—システム理論的教育史における『国家』の論じ方とその可能性」 (教育哲学会第 55 回大会課題研究報告) 『教育哲学研究』第 107 号、49-53 頁
- ⑫ 渡邊隆信 「ドイツ新教育における学校空間の創造—オーデンヴァルト校を事例として—」 『兵庫教育大学研究紀要』第 39 巻、2011 年、1-14 頁

[学会発表] (計 6 件)

- ① 宮本健市郎 「アセスメント(学力テスト)における基準の意味と機能：基準の外在化と教育目的」 日本デュイ学会、関西学院大学、2011 年 10 月 2 日
- ② 宮本健市郎 「アリス・バロウズの学校建築思想—子ども中心の教育環境の発見—」 アメリカ教育学会、九州大学 2012 年 10 月 13 日
- ③ 宮本健市郎 「エンゲルハートの学校建築思想：工場モデルから家庭モデルへ」 アメリカ教育学会、上智大学 2013 年 9 月 28 日
- ④ 山崎洋子 「イギリス教員養成の歴史から何を学ぶか？—教職の複雑さと進歩主義教育の時代—」 教育思想史学会第 23 回大会シンポジウム、慶應義塾大学、2013 年 9 月 14 日
- ⑤ 山名淳 「<学校=共同体>に穴を穿つ—『アジール』論からみた『新教育』の学校」 教育思想史学会第 21 回大会シンポジウム、日本大学文理学部、2011 年 9 月 18 日
- ⑥ 渡邊隆信 「理論—実践問題と教職の専門性—<現代ドイツ教員養成の思想史>に向けて—」 教育思想史学会第 23 回大会シンポジウム、慶應義塾大学、2013 年 9 月 14 日

[図書] (計 10 件)

- ① 山崎洋子 「歴史と教育—教育史の世界へ」 宮野安治、山崎洋子、菱刈晃夫『講義 教育原論—人間・歴史・道徳』成文堂、2011 年、65-165 頁
- ② Yamasaki, Yoko (山崎洋子), “Iconic Sculpture in the Japanese Decorated School: Citizenship, War and Peace,”

in Catherine Burke, Jeremy Howard, Peter Cunningham, *The Decorated School*, Black dog Publishing, London U. K., (2013), pp. 28-34.

- ③ 山名 淳 「グローバル化と学校教育」
石戸教嗣・今井重孝編『システムとしての教育を探る』勁草書房、2011年、281-299頁
- ④ 山名 淳 『「もじゃペー」にくしつけ>を学ぶー日常の「文明化」という悩みごと』東京学芸大学出版会、2012年
- ⑤ 山名 淳 「都市ーージンメル思想に内在する人間形成論を解説する試み」森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房、2013年、76-94頁
- ⑥ 渡邊隆信 「教育コミュニケーションの規程要因としての時間割」杉尾宏編『教育コミュニケーション論ー「関わり」から教育を問い直すー』北大路書房、2011年、114-141頁
- ⑦ ロイ・ロウ 山崎洋子・添田晴雄監訳『進歩主義教育の終焉：イングランドの教師はいかに授業づくりの自由を失ったか』知泉書館、2013年
- ⑧ H.-E.テノルト 山名 淳・齋藤正樹・藤岡綾子訳「知の秩序における形態変容ー19世紀末から1945年までのベルリン大学」『教育史学会第55回大会シンポジウム報告集』京都大学、2011年、23-47頁（訳者解題を含む）
- ⑨ N.ルーマン 山名 淳訳「教育科学における理論交代」N.ルーマン 馬場靖雄他訳『社会構造とゼマンティック』法政大学出版会、2013年、109-209頁
- ⑩ 山名 淳・宮本健市郎・山崎洋子・渡邊隆信『新教育運動期における学校の「アジュール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究』（平成23-25年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書）

〔産業財産権〕 該当せず

〔その他〕 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山名 淳 (YAMANA, Jun)
京都大学大学院・教育学研究科・准教授
研究者番号：80240050

(2) 研究分担者

宮本 健市郎 (MIYAMOTO, Kenichiro)
関西学院大学・教育学部・教授
研究者番号：50229887

山崎 洋子 (YAMASAKI, Yoko)
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号：40311823

渡邊 隆信 (WATAB|NABE, Takanobu)

兵庫教育大学大学院・学校教育研究科・教授

研究者番号：30294268